

本学への志望動機とその後の 適応状態について —第1報—

学生相談室：門前豊志子・倉戸ツギオ・

河合 熙・立川 皓三・西川 倫子

目 的

入学時の志望の動機が、その後の学生生活や学校への適応状態に影響を与えるのではないかという志望動機の問題が近年注目されてきている。

特に、短大の2年間というのは、時間的にもハードスケジュールに追われ、クラブ活動などの課外活動も満足にでき難いこともあり、そのために大学生活への期待が裏切られ、失望を少なからず抱く学生が意外と多い。また、上記の場合とは逆に、入学時さほど期待を抱いて入ってこなかった学生のなかにも、良き友人を得たり、クラブ活動に没頭したりして、学生生活を有意義にすごしてゆける学生もいるであろう。

当学生相談室へ来談する学生のなかには、いま自分のいる科がつまらないとか、自分に向いていないのではないとか、学校が面白くないなどの理由で、勉学への意欲を失ったり、失望から立ち直れず、入学時の志望の動機が後まで尾をひいて、いまだ学校になじめず退学しようか続けようか迷ったり、ひいては登校拒否の症状を呈している者が増加してきているように思われる。

従って、入学時の志望動機がその後の学生生活にいかに関与し影響してゆくのかを追跡的に検討してみることが必要のように思われた。

今回は、まずはじめに本学への志望動機と性格特徴との関連を捉えることを目的として、第1に、異なる志望動機を示して入学してきた学生について志望動機による科別の特徴があるか否か、第2に、異なる志望動機を示した学生間に性格特徴の相違が認められるか否かを検討することにした。

仮 定

従来の文献や相談の症例報告などから併せて考えて次の様な仮定をたててみた。

本学に目的をもち明確な志望動機を有する学生は、2年間、きわめて適応的な学生生活を送ることができるであろう。

それに対し、志望の動機があいまいであったり、全く動機もなく、なんとなく合格してから入学したという学生や、仕方なしに入学したという学生は、2年間の学生生活のなかで、教師とのかかわりや友人関係を通して意欲的になってゆく場合と、いつまでも入学時の失望感、虚無感、挫折感などから回復できず意欲を喪失し不適応的な状態に陥ってゆく場合があるのではないかと考えられる。後者の場合は、退学やずる休みの傾向となって現われてくることが予想されよう。

調 査 方 法

①対象 昭和50年度本学入学生 592名

英文科 160名

保育科 133名

被服科 129名

食物科 128名

キリスト教科 42名

年齢 18才—19才、性別 女子

②手づき 合格決定者に入学案内と同時に相談カード（表1参照）を配布し記入させ、入学時に回収した。

入学後4月のガイダンスにY—G性格検査を施行。

③整理法 相談カードの設問1、設問2を以下に示す1から4の志望動機としてまとめた。

志望動機1：志望した科に入れて満足している。

志望動機2：親や教師にすすめられて志望したが、現在では他の科などに変わる意志はなく不満はない。

志望動機3：いやいやながら志望した。できれば他

大学や他の科へ変わりたい。

志望動機4：その他。とくに志望した動機はない。

Y-G性格検査の結果は、標準化された基準に従い、A型からE型の5類型に大別し、それぞれ亜型、準亜型、混合型まで区分した。

また、望ましい適応の段階としてY-G性格検査類型を以下に示す三段階に位置づけてみた。

ここで注意すべき点は、対象とする学生の年齢層が

青年期にあるということである。青年期は性格的にもまだ不安定な時期で、理想を求め、現実を否認する傾向がつよく、現実認識も主観的である。

従って、入学後2年間の成長の過程で、不適応的な段階から適応段階への移行も、またその逆の移行も考慮されねばならないが、これは今後の問題として後日検討することにして、今回は一応成人の基準をもとに類型化を試み段階づけてみた。

適応水準	Y-G性格類型
高い ↑	望ましい適応の段階 (適応的段階)
	D型 { D' 型 D 型
	C型 { C' 型 C 型
適応水準	一応の適応的段階 (準適応的段階)
	A型 { AD 型 AC 型 AA' 型 A' 型 AB 型 AE 型
	B型 { B' 型 B 型
低い ↓	不適応的段階
	E型 { E' 型 E 型

結果と考察

以上の方法で調査した結果は図1から図7に示す通りである。

志望動機を各科別に比較した結果は図1に示される通りである。この図から判るようにキリスト教科を除いて他の四科とも志望動機の1が、2, 3, 4に対し60%以上の高い割合を示していることが認められる。なかでも保育科は90%と圧倒的に高く、英文科、被服科が68%, 食物科が60%とつづいている。これらの結果から、保育科志願者が名実共に、保育者をめざしてやってゆこうとする姿勢を入学当初から抱いていることや、英文科、家政科も7割近くの学生が、最初からか

表1

氏名の最初の字を平仮名で記入して下さい
例えば「山田」の場合 田 のように

相談カード

ふりがな 氏名	生年月日 昭和 年 月 日生	平安女学院短期大学 科	入学年度 年	出身校 高校
I. あなたは本学にどんな理由で志望入学しましたか。該当するものに1つ○印をつけて下さい。				備考 (記入しないで下さい)
1. 自分の能力にふさわしい (自分に向いている) 2. 自分の希望する科があった。 3. 家族、親戚などに出身者がいる。 4. 先生、親等にすすめられて。				
5. 他に入りたかったが試験の結果やむをえず。 6. とくに理由なし。 7. その他 ()				
II. 本学入学にさいして、該当する項目に○印をつけて下さい。				
1. 志望した科に入れて満足している。 2. 志望した科ではないがこのままでよい。				
3. できれば他の科 () か他大学 () へ変わりたい。 4. その他				
III. あなたは入学後、学生生活で最も重点をおきたいと思っている項目に1つ○印をつけて下さい。				
1. 専門的知識技能を身につける。 2. 先生、友人との人間的接触をうる。 3. 大学生活をたのしむ。 4. 目ざす仕事に必要な資格をうる。				
5. 自分の趣味、特技、スポーツ等をのぼす。 6. 就職条件をよくし、将来の生活安定をはかる。 7. その他 ()				
IV. 本学であなたが学生生活をおくるに当り、知りたいことや不安に思っていることがあれば該当するものにいくつでも○印をつけて下さい。				
1. 学業 (履修・勉強方法、免許・資格取得など) 2. 課外活動 (入退部、学業との関係など) 3. 進路 (進学、転編入学、就職など) 4. 人生思想の問題 5. 対人関係 6. 異性との問題 7. 信仰の問題 8. 自分の性格、心理問題 9. 家庭の問題 10. 健康の問題 11. 学費の問題 12. アルバイト 13. 奨学金 14. 住居 15. その他 ()				写真 上半身・脱帽 顔がはっきりわかる写真を貼して下さい
V. あなたは上で○印をつけた問題について、相談室に相談しようと思っていますか。				
1. 問題によって相談したい。 2. 思っていない 3. その他 () イ. 他に相談相手がいる ロ. 自分でなんとかする ハ. 今のところ問題がない				

◆裏面カード記入上の注意をよく読んで正確に記入して下さい。

(1975年 月 日記載)

なり明確な目的意識を抱いて入学してきていることが判る。

キリスト教科は志望動機1から4の間に差が少ない。志望動機の1と3が30%，2と4が20%となっていることは、おそらく本人以外の親や教師のすすめや、第二志望でやむなく入学した学生の多いことを示し、入学当初の時点では明確な志望動機の乏しい学生が混在していることが認められる。英文科においても、志望動機3については、キリスト教科と同じ傾向を示している点、他大学へ進学を希望しながらもやむなく、不満足ながら本学にとどまらざるを得なくなった学生の存在が20%近く潜在していることを示している。

次に、図2に示された各科別Y-Gプロフィールの

特徴をみてみると、キリスト教科はY-Gプロフィールの適応的段階から不適応段階まで、比較的全般に散在しているのが特徴的である。これに対し、他の4科は、いずれもほぼ共通して①適応的段階のD'型、②準適応的段階のA、A'型、A''型、③AD、B'型の順序で頻数の高い傾向を示している。詳しくA型をみると、A型のなかでも適応的段階に近いD型よりのAD、A型傾向を示す者と、不適応的段階に近いA''型や、B'型傾向よりを示す者の両方に分かれていることは興味深い。これらの型はD型、B型よりいずれも外向的で、積極性に富み、活動性が大である性格傾向を示すが、情緒的には安定して成熟したタイプ（D傾向より）と、情緒的には不安定で、自己中心的、衝動性

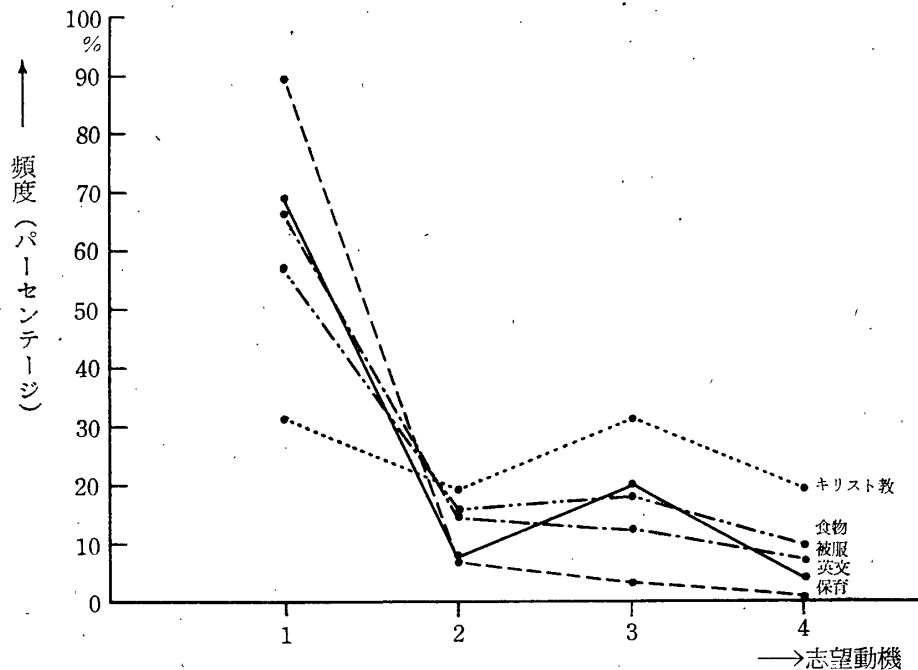


図1 志望動機の各科別比較

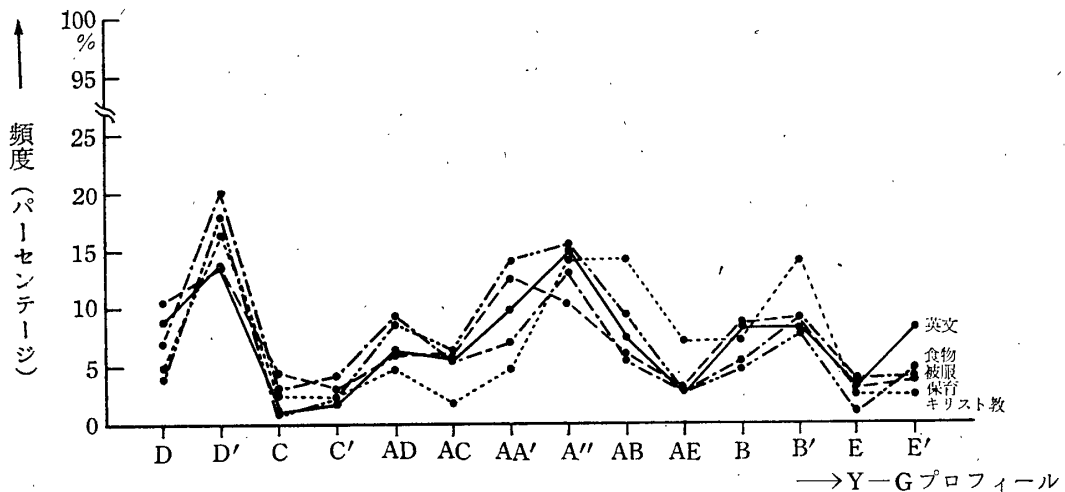


図2 Y-Gプロフィール各科別比較

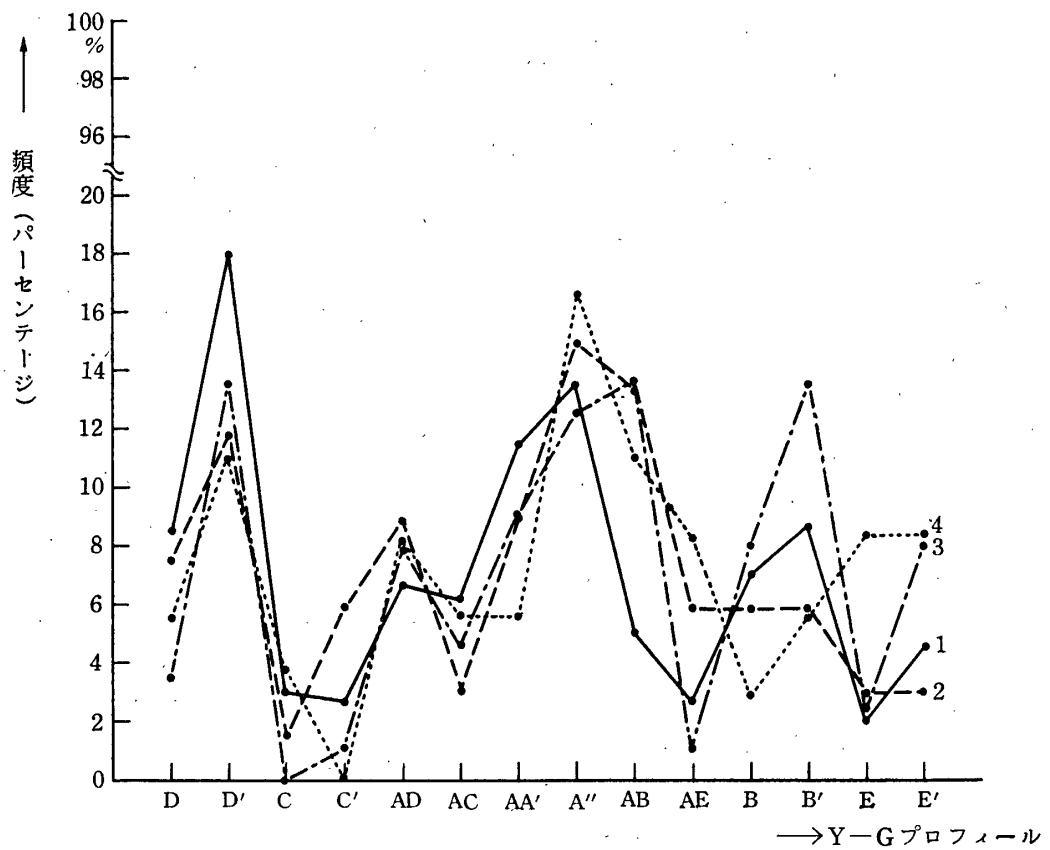


図3 志望動機 (1, 2, 3, 4) と Y-G プロフィール

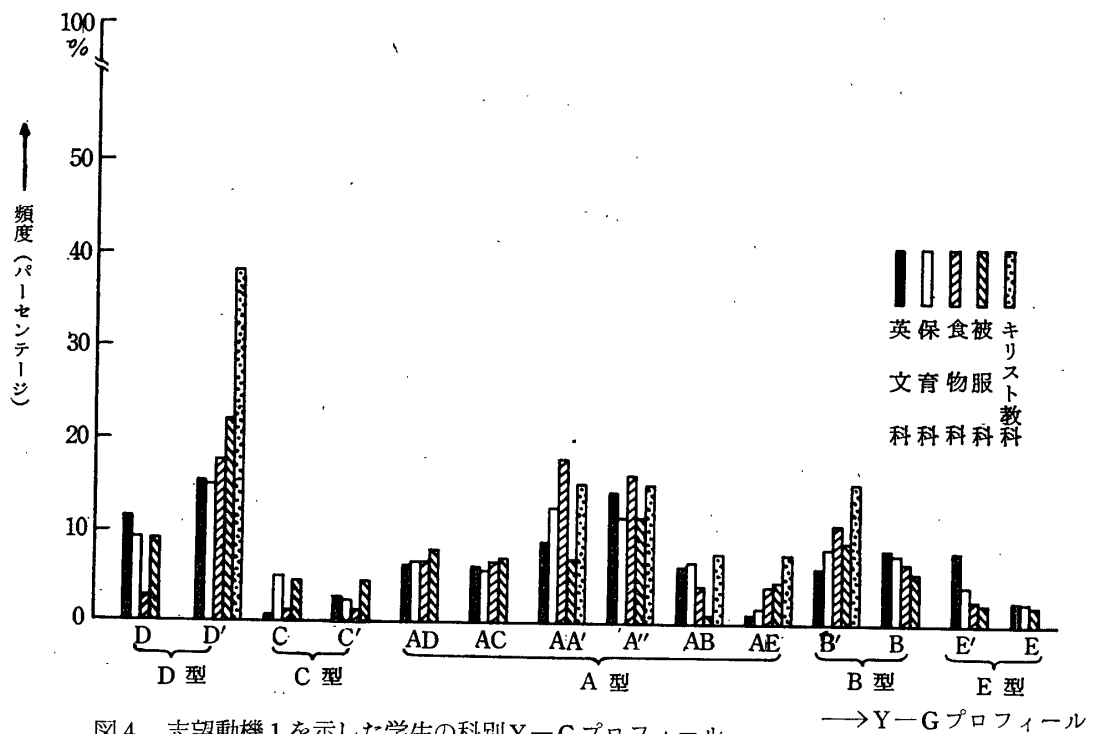


図4 志望動機1を示した学生の科別Y-Gプロフィール

のつよい未成熟なタイプ（B傾向より）の両極に分かれていることが特徴的である。なかでもキリスト教科は適応的段階のD'型が少なくA'', AB, A'型が多いことから準適応的段階の学生の多いことを示している。

これらY-G性格プロフィール特徴が志望動機とど

のような関連性をもっているか、その関連性を捉えてみたのが図3である。

志望動機1を示した学生のY-Gプロフィール特徴は、D, D'とD型が高く、つづいてA'', B'型となっている。

同様に志望動機2を示した学生のY-Gプロフィール

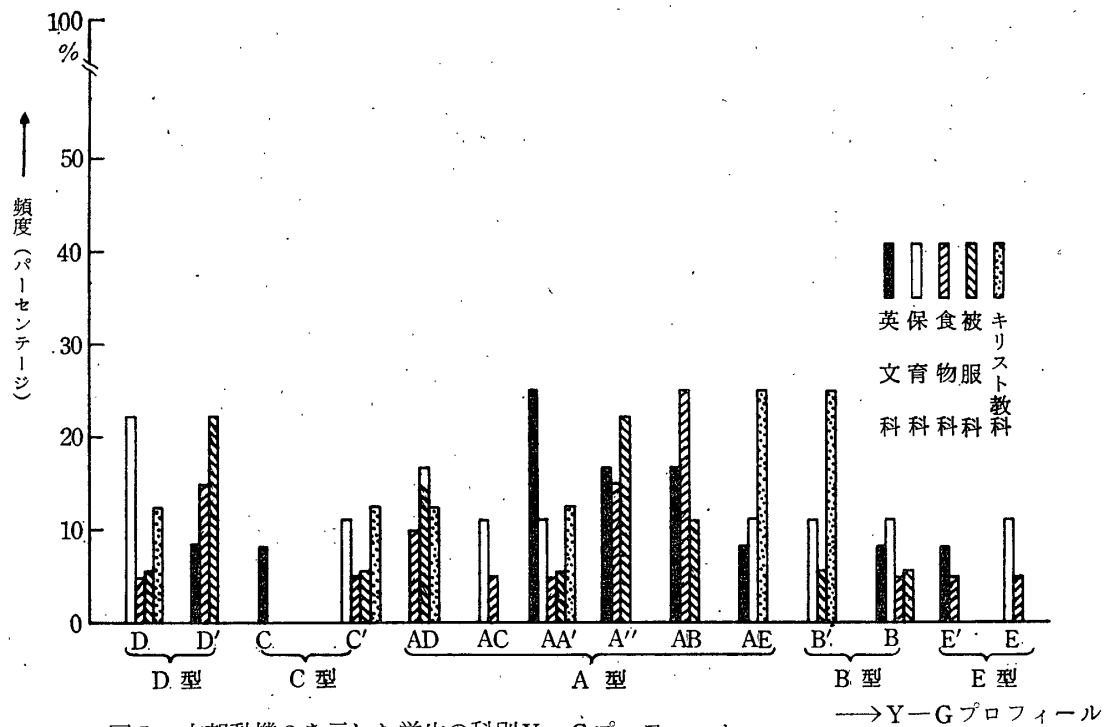


図5 志望動機2を示した学生の科別Y-Gプロフィール

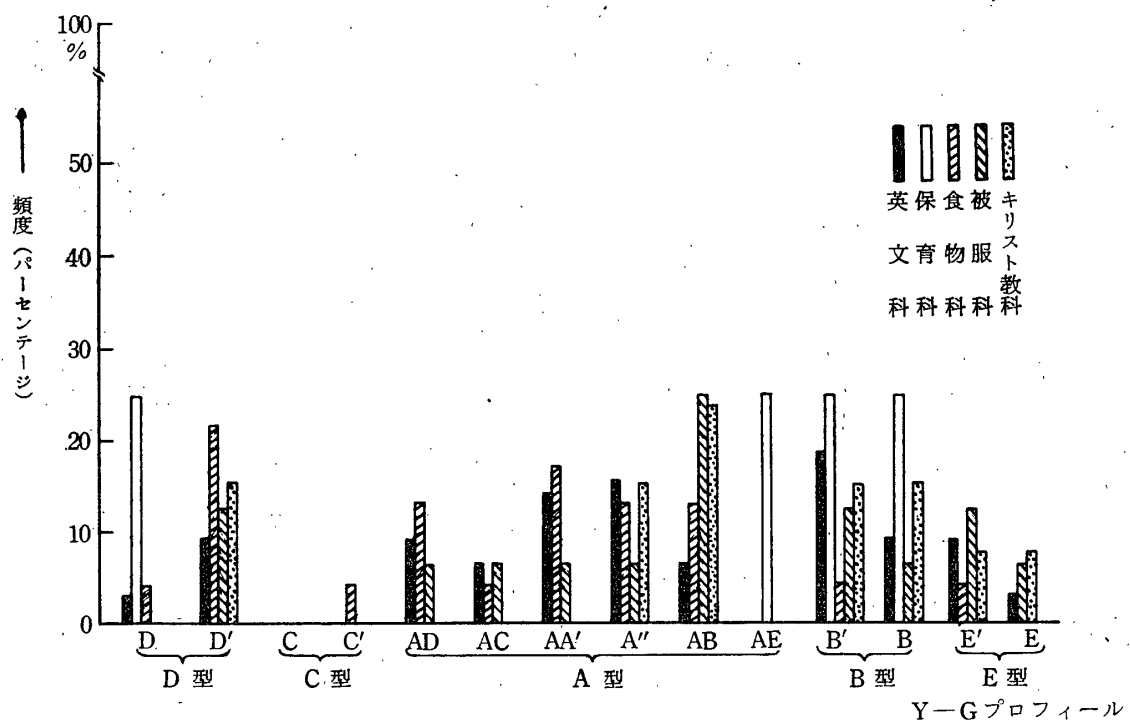


図6 志望動機3を示した学生の科別Y-Gプロフィール

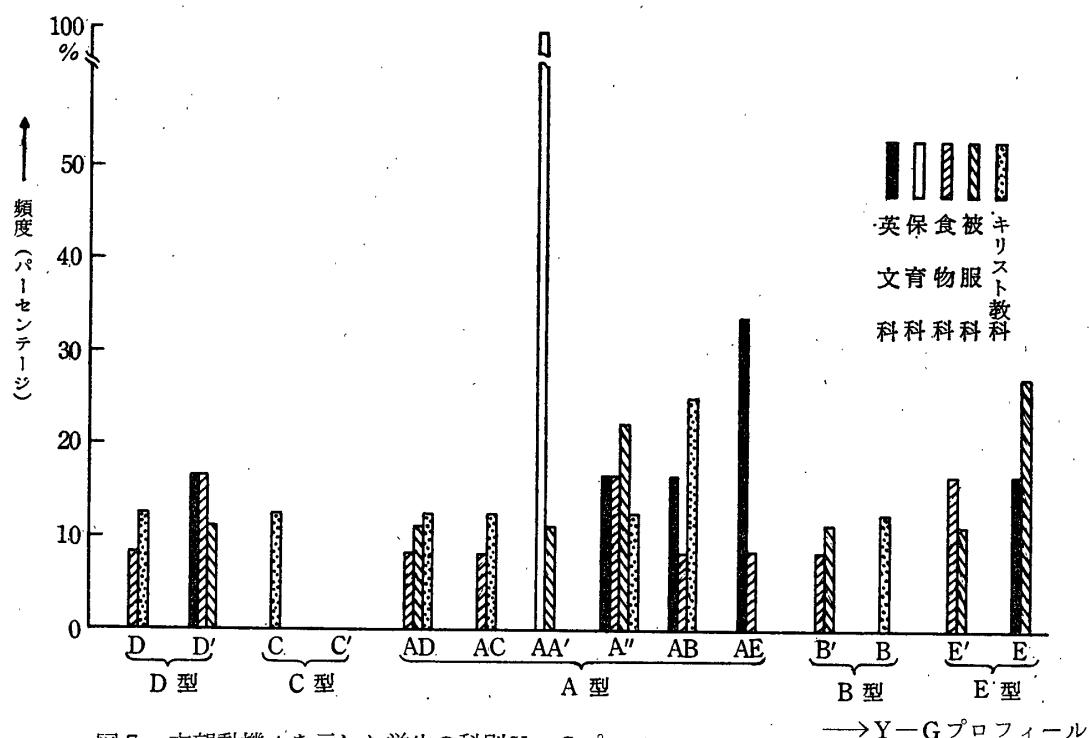


図7 志望動機4を示した学生の科別Y-Gプロフィール

ルは A'型が最も多くつづいて D', AD, D型となっている。

志望動機3については、B', AB, D'がほぼ同じ比率を示し、つづいて E'が高い比率を示している。

志望動機4については、A''が最も高く、AB, AE, E'型がこれにつづいている。

これらをまとめて考察すると、志望動機1, 2を示す学生群は志望動機3, 4を示す学生群に比べ、D, D', A', AD型と適応的段階に多く位置している。それに対し志望動機3, 4を示す学生群は、B', AB, AE, E'型と、やや不適応的段階近くに位置する傾向にあるといえる。このことから判るように、志望動機1, 2を示す学生群の方が、3, 4を示す学生群に比べ、情緒的に安定した状態にあると結論づけることができよう。志望動機3, 4を示す学生群を詳しくみると、E型やE'型に代表される消極的で神経質、内向的で自信がない「くよくよタイプ」と、B'型やB型で代表されるような活動的で積極的、にもかかわらず情緒的には不安定で気分の変動の激しい「むら気タイプ」の二通りに分けられることが判明した。これらの学生は、目標が定まらず、その場の雰囲気や気分外界に順応することができるが、本質的に自己をみつめ、ものごとを真剣に考えることを回避する傾向にあるといえよう。従ってこれら外界に向いているエネルギーをうまく水路づけて指導してゆけば、よりよい自己実

現の過程を見い出してゆくことが今後可能と思われる。

志望動機4に多くみられる「くよくよタイプ」の学生群には、心理指導的、精神衛生的配慮を試みて、自信の回復をはかることが先決と思われる。

次に志望動機とY-G性格プロフィールに、科別特徴が認められるか否かを調べたのが図4から図7である。

図2の科別Y-Gプロフィールでは低い値を示したキリスト教科が、志望動機1を示す学生にD'型が圧倒的に高いことをまず注目してみたい。これは、キリスト教科ということを知って目的的に入学してきた学生群が、他の大部分の学生の志望動機がいまいな科のなかで、クラスの統卒役として、またクラスの志気を盛りあげるファシリテーターとして貴重な存在となりうることを暗示しているように思われる。その他については、図4に示されるように志望動機1についてはほぼ全科D, D'型, A, A'型, B, B'型の三つの類型に大別して集中している。仮定した通りD型の適応水準に位置する者が各科共通して多いことを示している。

志望動機2で、すすめられて入学してくるタイプに、英文科ではA型A'型が多く、つづいてC型D'型が多い。これは、おとなしく平凡なタイプの学生が多いことを示しているのに対し、保育や被服では、意外とD, D'型, AD型など積極的なタイプが多いことが特

徴的である。

志望動機3では、全科ともD型が少なく、A、B、E型よりの傾向が多くなっている。とくに英文科では、志望動機3、4になるに従い、E型やB型の不適応的傾向が増加し、被服科も同様の傾向を示していることに注目したい。これらの学生は、もともと志望していなくて、いやいや入学している上、神経質で内向性がつよかったり、一寸したことで悩んだり自信を無くしたりすることが多く、不適応な状態に陥ることが予想される。保育科では、志望動機3、4を示す学

生が、他の科のようにE型ではなく、A、AE型やB、B'型に集中していることが特徴的で、志望動機2を示す学生にむしろE型傾向が多いということについては、今回のデータのみからは結論づけることが不十分であり、今後の追跡研究をまって、更に検討してゆきたいと思う。

今後は、今回の試みをふまえて、詳しく逐年の追跡調査をつづけてゆくつもりであるし相談活動が、悩みをもつ学生に少しでも役立つようになってゆけば幸いである。